

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月27日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720192

研究課題名（和文） 類推による構文の認可とそのメカニズム

研究課題名（英文） Licensing of Constructions by Analogy and Its Mechanisms

研究代表者

金谷 優（KANETANI MASARU）

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：50547908

研究成果の概要（和文）： 本来、非文とされる、あるいは文法の規範から逸脱する構文が実際には使用されている事例として、英語の *Just because of X doesn't mean Y* 構文 (e.g. *Just because of his dumb mistake doesn't mean you're going to have lights out in Manhattan.*) と副詞節による名詞句の修飾構文 (e.g. *his destruction of the fortune cookie before he read the fortune*) に関し、前者は既存の文法的構文からの類推により認可されることを明らかにし、どのような類推が働くのかを論じた。後者は、強制の原理が働き認可されることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： This study aims to analyze in terms of analogy constructions that are considered ungrammatical or non-canonical but are actually used (at least by some people). Such constructions include the *Just because of X doesn't mean Y* construction (e.g. *Just because of his dumb mistake doesn't mean you're going to have lights out in the city.*) and the NP-Adverb Clause construction (i.e. the modification of a noun phrase by an adverb clause, e.g. *his destruction of the fortune cookie before he read the fortune*) in English. In particular, this study made clear (i) that the former construction is licensed by analogies based on its similarities to other grammatical constructions existing independently, and (ii) that the latter construction is licensed by coercion.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：構文文法、類推

1. 研究開始当初の背景

本研究の題目にある「構文」とは、構文文法理論で言うところの構文であり、意味と形

式が慣習的に結びついたもののことである。この意味と形式の複合体としての構文は、構文文法理論においては、文法記述の基本単位

として捉えられる。このような文法観における「構文」とは、文レベルだけではなく、あらゆる文法レベル（語句、文、イディオムなど）で慣習化した意味と形式の結びつきを指し、互いにネットワークを形成すると考えられる（Fillmore et al. 1988; Fillmore 1989; Goldberg 1995; Michaelis 2003; Fried and Östman 2005）。

このような理論的背景を踏まえ、本研究では、以下の①および②を分析対象とし、本来非文法的とされる構文形式が構文間のネットワークと類推によって実際には容認される現象を分析する。

①because of 句が主語位置に生じた構文（以下、JBo-X DM-Y 構文と呼ぶ。）

②副詞節による名詞句の修飾構文（以下、NP-AdvC 構文と呼ぶ。）

まず、①に関し、形式的に類似した because 節が主語位置に生じた構文（以下、JB-X DM Y 構文, e.g. *Just because I'm a linguist doesn't mean I speak many languages.*）の存在は知られ、すでに広く研究がなされている（Hirose 1991; 廣瀬 1999; Bender and Kathol 2001; Matsuyama 2001）。一方、JBo-X DM-Y 構文は、非文であると考えられ（cf. Matsuyama 2001）、言及している研究もほとんどなかった。しかしながら、当該構文は実際には使用されている現状がある。

次に、②に関しては、かなり容認度が落ちるとはしながらも、名詞派生の研究との関連で、すでに 1970 年代より現象自体は観察されている（e.g. Chomsky 1970, Ross 1973）。また、容認できる例として扱う記述的、理論的先行研究も存在する（McCawley 1998; Fu et al. 2001; 志澤 2010）。例えば、*destruction* のような動詞派生の名詞句が副詞節で修飾される事例（例：??*his destruction of the fortune cookies before he read the fortune*）に関して、Ross (1973)は、文法性が下がるものの非文法的とまではいえないと観察しているが、それ以上の分析はない。本来、名詞句を修飾することのできない *before* 節のような副詞節が名詞句を修飾しているにもかかわらず容認できる点が重要である。この現象に関して、有村他 (2009)では、副詞節が自由に生起できる動名詞 (*his destroying the fortune cookies before he read the fortune*) との類推による可能性を示唆している。これを手がかりに、より深く当該現象を掘り下げることが必要である。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、「1. 研究開始当初の背景」欄記載の通り、本来非文法的とされる構文形式が実際には容認される現象についての記述研究を行い、構文文法と類推の観点からそれぞれの記述研究を統合し、理論的

側面にも言及した発表をすることである。具体的には、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

(1) 類推によって認可されると考えられる2種類の構文の文法記述：複数の構文を分析対象とすることで、類推による構文認可の一般性を示す。

(2) 文法規則と類推とのせめぎあいで、一方が勝つために必要な条件：当然、あらゆる現象が類推によって説明されることはないので、どの程度まで類推によって認可されるのかを考察する。

(3) 類推が発動するために必要な条件：(2)との関連で、類推が生じるためには、比較される構文間に何らかの類似点が認められる必要があるが、意味的類似性、形式的類似性、両方の可能性のうち、どの部分の類似性が類推を発動するのかという点を明らかにする必要がある。分析対象と類推を発動する元構文が「似ている」というために、「どの部分がどのように似ているのか」を明らかにする必要がある。

3. 研究の方法

(1) 2010 年度

①NP-AdvC 構文のデータの収集とデータベースの作成を行う。

②プラハで行われる第6回国際構文文法学会に参加し、構文文法に関する最新の知見を収集するとともに、構文文法理論の動向を調査する。

③NP-AdvC 構文の意味的、統語的、談話的側面からの詳細な分析を開始する。

④類推に関連する書籍を購入し、知見を収集する。

⑤JBo-XDM-Y 構文に関して、英語以外の言語（ドイツ語、スペイン語、ブラジルポルトガル語）のコーパス調査及び母語話者への聞き取り調査等に基づき、データベースを作成する。

(2) 2011 年度

①NP-AdvC 構文の分析成果を奈良女子大学で行われる英語語法文法学会第19回大会で発表し、意見を広く求める。

②①の発表内容に対する意見をもとに、構文文法理論における類推の位置づけの考察を行う。特に、以下の3点に注目して分析していく。

(i) 修飾される派生名詞のタイプ

(ii) 修飾する副詞節のタイプ

(iii) 前置詞句 (*before NP* など) との関係特に(iii)に関して、副詞節を導く従属接続詞と同じ形の前置詞によって導かれる前置詞句にした場合、形容詞的にも解釈することができるので、類推の方向性として、有村他の示唆するような「動名詞と派生名詞の類推」に加えて、「形容詞的前置詞句と副詞節の類

推」の可能性も考えられる。

③国内外の学会に出向き、収集した知見を前年度より引き続き行ってきた JBo-XDM-Y 構文に関する論文執筆へフィードバックしていく。

④JBo-XDM-Y 構文の分析に前年度の研究成果を加えたものをまとめ、論文としての体裁を整え、投稿へ向けて準備を開始する。

(3) 2012 年度

①前年度までの分析を統合し、構文文法理論における類推の位置づけについて、より理論面に貢献できる内容で、大韓民国で9月に行われる第7回国際構文文法学会での口頭発表を行う。

②①の発表内容を論文として発表できる形にする準備を行う。

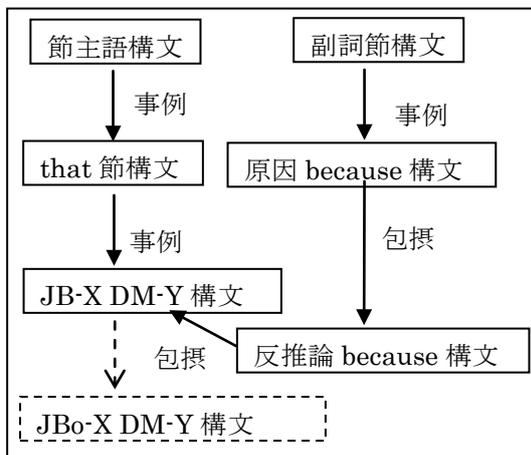
③本研究課題を通して得られた成果を統合して論文にまとめ、国際誌に投稿する準備を行う。

4. 研究成果

(1) JBo-X DM-Y 構文について

①まず、コーパス調査を通して JBo-X DM-Y 構文の実例が存在することを明らかにした。

②①に基づき、「当該構文は類推により認可されているのであって、廣瀬 (1999) の構文継承モデルを修正することで存在が予測できる」と提案した。これを図示すると以下の「図 1」ようになる(実線が継承リンクを、点線が類推による構文の生産を表す)。



【図 1：構文間の継承関係と類推】

本提案の廣瀬 (1999) との最大の違いは、推論 because 構文 (例: It has rained, because the ground is wet) を経由しない継承関係である。これは、JB-X DM-Y 構文 (および、その複文形式である反推論 because 構文 (例: Just because John is rich, it doesn't mean that he is happy)) が、原因 because 節構文 (例: The ground is wet because it has rained) と類似している一方、推論 because 節構文とは大きく異なっているという観察から導き出

される。このように考えると、because 節主語構文と原因 because 節構文との類似点が浮き彫りになり、JBo-X DM-Y 構文が生産されたのは、原因 because 節が because of 句に言い換えられることから、[原因 because 節: because of NP = JB-X DM-Y 構文: JBo-X DM-Y 構文] のような類推により、JB-X DM-Y 構文の because 節が because of 句に変えられたためだと結論づけた。この成果を論文にまとめ、2011 年に発表した (*Tsukuba English Studies* 29, 77-94.)。

③JBo-X DM-Y 構文に対応する他の言語のデータを収集し、データベース化した。

(2) NP-AdvC 構文について

①被修飾要素・修飾要素に関する意味的制約を提案し、本研究課題の開始当初たてた「JBo-X DM-Y 構文と同じような類推に基づいて NP-AdvC 構文も認可される」という仮説に基づく説を 2011 年秋に行われた学会で発表した (英語語法文法学会第 19 回大会口頭発表)。

②①の発表内容の一部 (すなわち、被修飾要素・修飾要素に関する意味的制約) を論文にまとめ、2012 年に発表した (『英語語法文法研究』19, 114-128.) (なお、内容を①の発表内容の一部に制限した理由は、③に記すとおりである)。また、本研究結果においては、派生名詞以外の名詞も修飾されること、副詞節以外に純粋な副詞によっても修飾されることを明らかにし、本研究課題開始当初、予測していたより一般性の高い現象であることも示唆した。

③①の説明 (= 類推に基づく説明) ではうまく説明しきれない場合があることが明らかになったため、①の発表時にいただいたコメントをもとに、代案として、構文文法理論において仮定されている「強制」を応用した説明を行い、2012 年夏に行われた学会で発表した (the 7th International Conference on Construction Grammar 口頭発表)。「動詞句+副詞節」が、主語や前置詞句補部のような本来名詞類が要求されるスロットで用いられると、周囲の統語環境により、統語範疇が名詞に強制され、その結果、NP-AdvC 構文が産出されるという考え方を提案した。

④③では、なぜ、NP-AdvC 構文が容認されるのかを説明したが、なぜ、容認度が下がるのかに関しては、詳述していない。そこで、Jackendoff (2002) 等で提案される Parallel Architecture の枠組みに基づく説明を試み、成果を 2012 年秋に行われた学会で発表した (Interfaces in English Linguistics 2012 口頭発表)。本発表では、NP-AdvC 構文の統語範疇を決定するための意味構造が変則的なため、意味から統語への入力のためのインターフェイスに問題が生じ、当該構文は容認されにくくなると提案した。

(3) 両者の統合について

当初、JBo-X DM-Y 構文と NP-AdvC 構文は、同じようなタイプの類推によって認可されるのか仮説を立て、本研究を開始した。しかし、研究を進めるにつれて、「4. 研究成果」欄(2)・③で述べた通り、NP-AdvC 構文については当初立てた仮説に基づく説明が困難であることが明らかになった。それにとともに、本研究課題の目的の一つであった JBo-X DM-Y 構文と NP-AdvC 構文を統一的な枠組みで統合し、発表することは不可能となった。一方、そこから、同欄(2)・③および(2)・④に記した当初予定していなかった研究成果が得られた。また、今後、異なるアプローチを経て、より一般性の高い説明原理へとつなげていくために、軌道修正および基盤形成をすることができた。このように、当初の目的の一つは不達成となったものの、結果として当初の計画以上の成果もあげられたという点では、有意義であった。両構文の統一的な枠組みでの説明に関しては、本研究課題で得られた成果をもとに、今後、その可否も含めて、さらに議論を重ねていく必要がある。

(4) その他の付随的な成果

上記(1)~(3)に加え、本研究課題に付随する以下の成果が得られた。

①副詞節による「言いさし文」の分析を通じて、日英語において、どのような語用論的が、どちらの言語でより強く発動するのかを 2010 年秋に行われた学会で発表した(日本英語学会第 28 回大会ワークショップ『迂言と縮約と日英語の差異』口頭発表)。

②①を研究報告書としてまとめて 2011 年春に発表した(*JELS* 28, 194-195 [西田光一、草山学、今野弘章、山口治彦と共著])。

③副詞節による修飾に関連する現象として、メタ言語的理由構文に関する論文をまとめ、2012 年秋に発表した(*Tsukuba English Studies* 31, 1-18)。

④ホームページを作成し、研究成果を広く公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

(1) 金谷優 (2012) 「副詞節による名詞句の修飾」『英語語法文法研究』19, 114-128. (査読有)

(2) Kanetani, Masaru (2012) “Another Look at the Metalinguistic *Because*-Clause Construction,” *Tsukuba English Studies* 31, 1-18. (査読有)

(3) Kanetani, Masaru (2011) “Analogy in Construction Grammar: The Case of *Just Because of X Doesn't Mean Y*,” *Tsukuba*

English Studies 29, 77-94. (査読有)

(4) 西田光一、金谷優、草山学、今野弘章、山口治彦 (2011) 「迂言と縮約と日英語の差異」*JELS* 28, 194-195. (査読有)

[学会発表] (計 4 件)

(1) Kanetani, Masaru (2012) “Legitimate vs. Faulty Interfaces: The Case of Functional Shift and Anomalous NP-Modifications,” *Interfaces in English Linguistics* 2012, Oct. 12-13, カーロリ・ガーシュパール・カルヴァン派大学 (ハンガリー) .

(2) Kanetani, Masaru (2012) “Mechanisms When an Adverb Clause Modifies a Noun Phrase,” the 7th International Conference on Construction Grammar, August 10, 2012, 韓国外国語大学校 (大韓民国) .

(3) 金谷優 (2011) 「副詞節が名詞句を修飾するとき—構文と類推の観点から—」英語語法文法学会第 19 回大会、2011 年 10 月 15 日、奈良女子大学.

(4) 金谷優 (2010) 「複文と言いさし文から見る日英語の語用論的原理」日本英語学会第 28 回大会ワークショップ『迂言と縮約と日英語の差異』口頭発表、2010 年 11 月 13 日、日本大学.

[その他]

ホームページ等

<http://www.u.tsukuba.ac.jp/~kanetani.masaru.gb>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金谷 優 (KANETANI MASARU)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：50547908